

那珂川沿川住民の河川利用行動の変遷について

九州産業大学大学院工学研究科 学生会員○前原暢仁 九州産業大学工学部土木工学科 正会員 山下三平
九州産業大学工学部土木工学科 非会員 満永洋平 九州産業大学工学部土木工学科 非会員 山内徹

1. はじめに 住民の意見や行動に柔軟に対応する河川計画を実施するためには、河川に対する住民の意識の変遷とその原因を知らねばならない。筆者らは1988年から7年毎に、時を隔てて同一書式の調査を繰り返す縦断調査を用いて、福岡市を流れる都市河川那珂川の沿川住民を対象とした河川に対する意識と行動の変遷を検討している^{1)~4)}。本報では住民の行動の変遷について分析した結果を報告する。

2. 調査と分析の概要 調査の対象地域は福岡市の中心部を貫流する都市河川那珂川の河口から上流約13kmの現人橋までとし、両岸約1kmを目安に幹線道路や鉄道、行政区をもとに設定した。さらにその地域を人口がほぼ均等になるように15のゾーンに分けた。調査結果の精度は1988年が2.3%、1995年は2.1%、2002年が2.2%である。表-1に調査項目の概要を示す。住民の行動の変遷を検討するために、まず、年毎の子供の頃、最近、および将来の利用目的項目に対する応答の相関を調べる。また、自宅から川までの距離と利用頻度との関係の変遷、距離と河川利用目的との関係の変遷を分析する。なお今回、住民の自宅までの距離と行動の関係の分析は、全15ゾーンのうちそれぞれのゾーンの有効回答数に占める自宅までの距離がわかっている調査票の割合が3回の調査とも90%以上になっている7つのゾーンについて行う。

3. 住民活動の変遷 <利用目的>の項目は16項目の複数回答形式である。このうち「水泳・水遊び」「釣り」「水生生物採集」「昆虫採集」「植物採集」「船・筏遊び」の6項目を「親水活動」、それ以外の10項目を「非親水の活動」と分類する。つぎに子供の頃、最近、および将来の3時点相互の応答の相関が高いものの割合を親水・非親水の分類ごとにもとめ、年毎に比較する(図-1~3)。

図-1は子供の頃と最近の目的の関係を表すものである。子供の頃の「非親水の活動」と最近の「親水活動」ならびに「非親水の活動」の関係が、年毎に強くなることがわかる。図-2は子供の頃と将来の目的との関係を表している。子供の頃の「親水活動」と将来の「親水活動」において、3時点いずれの調査でも、相関のある項目が多いことが認められる。図-3は最近と将来の目的の関係を表すものである。最近の「親水活動」と将来の「非親水の活動」、最近の「非親水の活動」と将来の「親水活動」および最近の「非親水の活動」と将来の「非親水の活動」の関係が年毎に強くなること

表-1 調査項目の概要

A	属性 (年齢・居住年数・性別・職業)
B	利用目的 (小学生時代・現在及び将来(の別時))
C	イメージ (小学生時代及び現在)
D	利用頻度 (小学生時代及び現在)
E	水害経験の有無
F	個別対評価 (大濠公園との好感度比較・愛着度・景観恩恵・資源恩恵)
G	河川に対する活動(町内会の役員・清掃活動への参加・仕事での河川利用)
H	その他(最近見た魚・「ふるさとの川モデル河川」への指定・前回調査への参加)

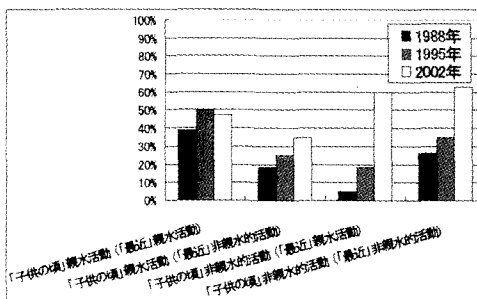


図-1 「子供の頃」と「最近」との間で相関のある項目の割合

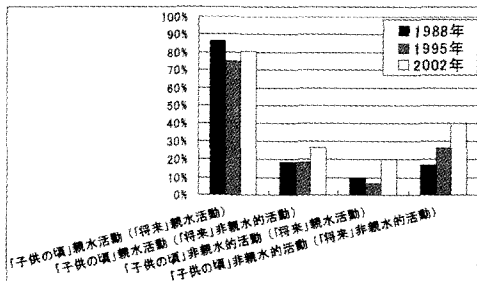


図-2 「子供の頃」と「将来」との間で相関のある項目の割合

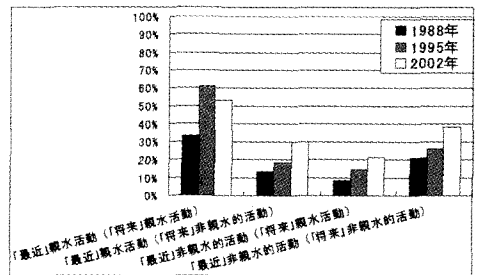


図-3 「最近」と「将来」との間で相関のある項目の割合

4. 行動と居住地までの距離の関係の変遷 住民の行動と自宅までの距離との関係の変遷を明らかにするために、距離を「250 m未満」「250 m以上 500 m未満」「500 m以上 750 m未満」「750 m以上 1000 m以下」の4つのグループに分類し、河川利用頻度と河川利用目的について検討する。

まず、河川に近い「250 m以下」では夏に川を訪れた頻度が低い住民の割合が年を追うごとに多くなるが(図-4)、しかし河川から遠い「750 m以上 1000 m以下」では利用頻度が高い住民の割合が年を追って多くなる(図-5)。つぎに、河川利用目的と距離との関係を調べると、「ランニング」「バードウォッチング」「散歩」の3つの項目において、年を追うごとに川から遠い住民による利用が増加することがわかる(図-6～8)。

5. まとめと考察 これらの分析の結果をまとめると以下ようになる。

- 1) 子供の頃に「非親水的活動」を行った人の、最近の河川利用目的は年毎に多様化してきている。
- 2) 子供の頃に「親水活動」を行った人は将来も「親水活動」を行う割合が高い。
- 3) 最近、「親水活動」「非親水的活動」にかかわらず河川を利用した人は、将来もさまざまな目的で河川を利用するようになってきている。
- 4) 自宅が川から近い人の河川利用頻度は低くなる。しかし、川から遠い人の河川利用頻度は高くなる。
- 5) 川から遠くに住んでいる人で、「非親水的活動」の「バードウォッチング」「ランニング」「散歩」を行う人の割合が高くなってきている。

したがって、

- ① 子供の頃に「親水活動」「非親水的活動」に関係なく河川を利用した人は、最近および将来に向けて、身近な河川を多様な目的で利用するようになりつつある。
- ② 遠くから河川に「非親水的活動」の目的で訪れる人々が多くなりつつある。

今後の課題は今回わかった住民の行動の変遷と土地利用の変遷との関係を明らかにすることである。

参考文献

- 1) 山下三平:都市河川の環境イメージに関する基礎的研究,九州大学学位論文,1993.
- 2) 本吉宣一他:那珂川に関する河川環境の縦断的調査,九州産業大学卒業論文,1995.
- 3) 嶽村繁樹他:那珂川の河川環境に対する住民意識の変遷に関する調査研究,九州産業大学卒業論文,2002.
- 4) 山下三平,前原暢仁:河川環境に関する住民意識の構造変化について,第31回環境システム研究論文発表会論文集,pp.189-194,2003.

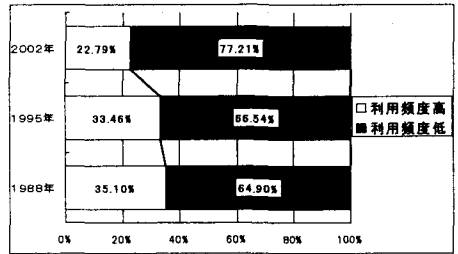


図-4 夏の250 m以下の利用頻度

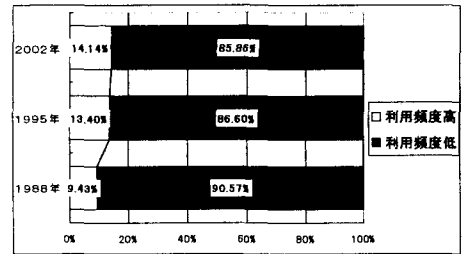


図-5 夏の750 m以上 1000 m以下の利用頻度

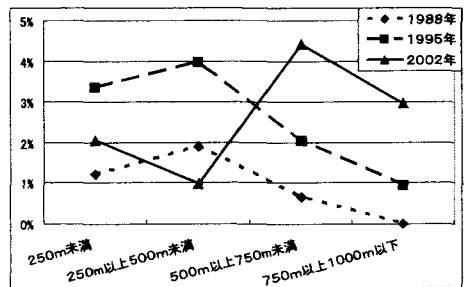


図-6 距離ごとのバードウォッチングの割合

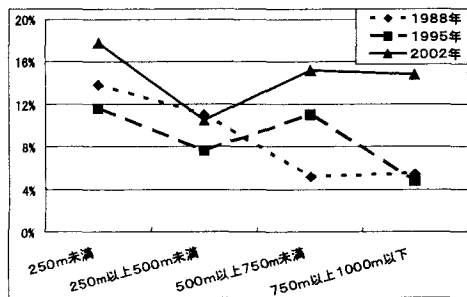


図-7 距離ごとのランニングの割合

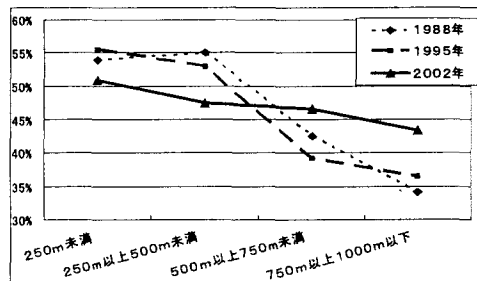


図-8 距離ごとの散歩の割合